
RAIN ~ さよなら、そしてありがとう ~

ウォーター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAIN（さよなら、そしてありがとう）

【Nコード】

N3481H

【作者名】

ウォーター

【あらすじ】

ある雨の日…。悲劇は突然訪れた……。 “好敵手^{ライバル}の死” という名の悲劇が……。 新一が死んだ後の、平次の一人称です。新一が死ぬのは嫌ッ！という方は見ないことをオススメします。

（前書き）

あとがきに重大発表があります。

「……………」

その日は、やたらと雨がよう降つとつた日やった…。

俺はその日、目の前の光景に言葉を失い、一步も身動きが取れない状態でおつた……。一体、此処で何が起こつたのか、俺には全く分からなかった……。ただ1つ分かつたのは、俺の目の前に広がつておつた光景は、あまりにも信じられん光景やったつちゆうことだけやった…。俺は、その光景に否定するかのように、まるで蚊の鳴くような声で無意識に口ずさんでおつた…。

「工藤……………」

そう、そこにおつたのは、身体からだと雨で濡れた道路を赤く染めてぐつたりとしとる工藤の姿やった…。

その光景に、俺の頭は何処か混乱しておつたらしく、暫くその状況じょうきを飲み込めずにおつた。どうせ俺を脅おどかす為に、工藤がワザと死んだ振りをしとる…きつとそうなんや……。！！そう自分に何度も言い聞かせておつた。そう言い聞かせ、漸よつやく動くようになった足を早く動かして工藤に近付き、何処かぎこちない笑顔で言つたんや。

「お、オイ、工藤……。そないな冗談、俺には通用せんで……。どうせ、俺を脅かす為に考えたことなんやろうけど、俺は全く驚かんで……。なあ、工藤……。何か返事しろや……。俺、めっちゃ虚しくなるやないか……。オイ、何か言え…言えやッ！！工藤ッ！！！！！」

せやけど、俺が何を言っても、工藤が返事を返すことは無かった……。

俺はピクリとも動かない身体を抱き起こし、何度も身体を揺すって工藤の名前を呼んだんや。

せやけど、もう手遅れやった……。

工藤の身体はもう冷とうなっておった……。恐らく、この雨と、大量に流れ出た血によって、工藤の身体から体温を奪ったんやろうと、容易に想像出来た。そして工藤の身体には、何発もの弾が深く入り込んだ傷が痛々しく残っておった。そのあまりにも痛々しい光景に、俺は工藤の死に顔をまともに見ることが出来ず、そのまま俯いておった。それはまるで、“工藤が死んだ”という現実から逃げているかのようやった……。

そう、あの時、俺はもっと早く気付けば良かったんや……。これから工藤が向かう場所は、とても危険な場所だということに……。

そう、あれは今から数時間前……。俺は、自室で暇そうに雑誌を読んどった。その時、俺の携帯がブーツ、ブーツと鳴り始めたもんやから、俺は今読んどった雑誌を放り投げて、その携帯を取って液晶画面を見ずに応答しとった。

「あゝ、こちら服部……。」

『あ、服部か？久しぶりだな。』

突然電話の向こうから聞こえて来た懐かしい声に、俺は嬉しさを感じながらも、敢えて平静を装って返答しておった。

「何や、工藤か……。」

『《何や、》とは何だよ、服部……。』

「ハハハ……。スマンスマン……。んで？何か俺に用なんか？急に電話なんか寄越しおって……。」

『あッ……！！用件を言うのをすっかり忘れてた……！！』

（工藤のやつ……。ホンマ良い神経しとるわ……。）

工藤の返答に半ば呆れ顔で聞いた俺は、工藤に聞こえないように、深く溜め息をついた。せやけど、その時やった。工藤の口から、意外な言葉が返って来たんは……。

『ついさっき、FBIから連絡があつて、黒の組織《奴ら》のアジトが分かったんだ！俺達は、今からFBIと一緒にそのアジトに向かい、黒の組織《奴ら》をぶっ潰して来る！！だから、服部は……』

「ちょっと待てや、工藤ッ！！今、自分が何を言つたか、分かつてるんか！？それはお前が……ッ！！？」

『……分かつてるさ……。お前の言いたいこと位……。もし、俺が今、黒の組織《奴ら》のところに向かつたら、生きて帰って来れる保証は無い……。』

「せやったら、何でそないな危険な場所に行こうと……。！！？」

俺は工藤に、その理由を聞こうとした時、前に工藤が言つとつたことを思い出した途端に、次の言葉を失つておつた。工藤が危険を犯してまで行こうとする理由が分かつたからや。そう、その理由は……。

《自分の身体を取り戻し、そして自分をこんな目に遭わせた黒の組織《奴ら》を壊滅させる為……。》

その理由が分かつた途端、俺には工藤を止める権利が無いことに気

付かされた。

その組織のせいで、工藤の人生を大きく狂わせてしまったことは、今までの工藤の様子から痛い程分かっておった。

せやから俺は何も言えなかった。

工藤には、今まで失っていた人生を取り戻して欲しいと思っとなんか……。

せやけど、それを上手く工藤に伝える術が、俺の中には存在せえへんかった……暫く携帯を握ったまま黙つとると、電話の向こうから『服部く？大丈夫か？』と、工藤が心配する声が聞こえて来たもんやから、俺は呆れ顔をしながら、軽く息を吐いた後、真剣な表情で少し声を落として言っただんや。

「工藤……。俺はもう何も言わん……。これは、工藤が決めたことやらなあ……。せやけど、これだけは約束してくれや……。」

「ん？何だよ……、“約束”って……。」

「絶対生きて帰って来るんやで……。生きて……。姉ちゃんに自分の思いを伝えろや……。この約束破ったら、俺、工藤のこと許さへんで……！」

「……ハハハ……。服部らしいな……。分かった……。その約束、必ず守るから……。じゃあ、もうそろそろ時間だから、またな……。」

」

「ああ……ほなまたな……。」

そう言った後、携帯の通話はブツツと切れ、その電話の向こう側は、ツーツーという音が永遠に鳴り響いておったんや……。俺はその後、携帯の通話を切り、窓越しにどんよりと曇った空をただジツと眺めとった。工藤が無事帰って来ることを願いながら……。せやけど、自分のこの選択が、後に悲惨な運命を辿ることを、俺はその時まだ気付かへんかった……。 “工藤の死” という悲惨な運命を辿るということに……。

俺は暫く現実から逃れる為に、工藤の死に顔を見んように俯いておったが、何時までもそうしておれんと思つた俺は、現実を受け止めることの恐怖を抱えながら、ゆっくりと俯けておつた目を上げて行つたんや。

そして漸く工藤の死に顔を見ることが出来た俺は、その顔に思わず普段は流さない涙を流しておつた。

工藤の死に顔は、思つた以上に穏やかやつた……。この時になって、俺は改めて、“工藤 新一”の凄さを知つたんや……。自分が立てた信念を曲げずに、最後までやり通す工藤の凄さに……。そして、こんな凄い工藤が、俺の憧れでホンマに良かったと思つたんや。俺は、止まらない涙を手で何度も拭いながら、工藤に最後の言葉を言つたんや。

「コラ！工藤ツー！！俺との約束をこんな簡単に破りおつて！！自分、その約束、必ず守るから……。」って言うつたやないか！！！！せやけど、工藤……ホンマにお疲れさん……。お前の願いは、しっかり叶つたで……。せやから、安心して眠れや……。工藤……。」

そして俺は、そのまま工藤の身体を強く抱き締め、街中響き渡るような声で泣いておったんや……。その時の雨は、俺と同じように、工藤の死を悲しんでいるように、強く降っておったわ……。

> e n d <

（後書き）

こんばんは。ウォーターです。今回は、梅雨に^{ちな}因んで、“雨”というテーマで小説を執筆致しました。あらずじとしては、新一が黒の組織に殺された後、そこに駆けつけた平次が、新一の死体を見つめる。その時、今まで新一に抱いていた自分の気持ちに気付くという感じになっています。いろいろと細かい設定内容は思いつ切り^{はぶ}省いている為、内容がかなり分かりにくい作品になっています。そして、平次の関西弁がとても難しい！と感じました。もしかしたら、変な関西弁を使ってしまうところがあるかもしれませんが。完成度が低い作品で本当にスイマセン。まだまだ未熟な部分が多い作者ですが、これからも宜しく願います。と、此処で重大発表があります。私が今まで執筆しておりました、『不思議な出会いと不思議な日常』は、内容を新しく変えて、改めて更新したいと思っています。それは何時になるかはまだ分かりません…。しかし、なるべく早く更新出来るよう、努めて行きたいと思っています。評価・感想等、お待ちしております。本日はこのような小説を読んで下さり、本当に有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3481h/>

RAIN～さよなら、そしてありがとう～

2010年10月11日00時51分発行